

## グローバルな英語コミュニケーション能力育成を目指す インターナショナル・チューター・プログラム

森 越 京 子  
坂 内 正

- 目 次
- I. はじめに
- II. 先行研究
- III. 本学科の取り組み
- IV. プログラムに対する学生の反応
- V. インターナショナル・チューターの利点
- VI. 結語

### I. はじめに

日本の英語教育において、アメリカ英語、イギリス英語を中心に、ネイティブスピーカー（英語母語話者）の使用している英語や欧米の文化を学ぶことが何よりもその学習目標となってきたことは疑う余地もない。また、これまでは、外国人教員として、主に白人の英語ネイティブスピーカーを採用し、テキストや教材もアメリカ英語の題材が多く見られた。北星学園大学短期大学部英文学科でも英米の英語を模範として授業を展開し、学生が少しでも英語ネイティブスピーカーと接する機会を増やすことで、学習者のモチベーションを高め、英語コミュニケーション力を伸ばす環境を提供してきた。しかし、グローバル化時代の現在、それだけでは不十分ではないだろうか。すでに多くの研究者が指摘しているように、英語を「国際語」と捉え、英語非母語話者との英語コミュニケーションにも対応するような英語教育を進めていく必要があ

ると考える。

具体的に、グローバルな英語コミュニケーション力を育成する方法とはどのようなものだろうか。すでに、海外での語学研修をアメリカやイギリスといった国だけではなく、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドに拡大し、近年では、大阪女学院大学などのように、英語を母語としないアジアで研修を行っている教育機関もある。インターネットの発展で、海外の学生とE-mail交流を行ったり、早稲田大学などでは、CCDカメラを使ったテレビ会議方式を用いて、オンラインでアジアの学生と英語で交流を行っている例もある。国内でも大都市や一部の地域では、日本在住の外国人の人口が増加し、その接触が増えている場合もある。

しかし、「北海道」、「札幌」という地域的な状況からは、グローバルな英語コミュニケーションといっても、実際その可能性は限られている。そこで、本稿では、グローバルな英語コミュニケーション力育成のための一つの試みである、インターナショナル・チューター・プログラムの実践について報告し、これからの英語教育の方向性について考察する。また、プログラム運営上の課題、英語学習者支援の可能性について述べる。

## II. 先行研究

英語の未来や英語教育の方向性について様々な議論がされているが、代表的なものに、Crystal (1997) やデイビット・グラッドル (1999) の文献がよく引用されている。

そこで取り上げられているように、Kachru (1986) の “inner circle,” “outer circle,” “expanding circle” を用いた図表から、英語母語話者より、英語を共通語や公用語として利用している、または、外国語として学んでいる非母語話者のほうがはるかに多いということが明らかである。この図表は、グラッドルが指摘するように、英語母語話者を中心に据えている点は問題であるが、英語の使い手について理解しやすい説明である。

前野 (2003) は、World English (世界英語) と New Englishes (新英語) という表現を用いて、非母語話者の英語使用がますます増え、自国内では、New Englishes と呼ばれる地域変種英語(たとえば、インド英語、シンガポール英語) が利用され、国外やフォーマルな場面では、標準英語とされるものを使用するようになると指摘している。場面に応じて標準英語と地域変種英語を使い分けることになり、もし英語の利用が日本国内でも増えることがあれば、そのような流れが日本でも起こり、つまり日本語や日本特有の文化を織り込んだ「日本英語」が誕生し、「標準英語」と TPO に応じて使い分けをする時代がくるかもしれないと述べている。

日本における英語教育では、「英語と言えば、アメリカ英語やイギリス英語」であり、英米人が話す英語だけが正しく、英米人になることが、英語教育の目標であるかのように、ほとんどの日本人が思っている点を指摘しているのは、後藤 (2002, 2004) の論文である。後藤は、「外国とのかかわりやコミュニケーションの場において国際社会の一員として生きていくためには私達日本人も、

好むと好まざるとにかかわらず、英語を使わざるをえないだろう。そのために欧米人を模倣する手段としてだけではなく、日本人・日本文化を意識し、自己のアイデンティティーを表現する道具として〈日本人の英語〉を作り上げていく必要があるだろう。英語の所有権は私達日本人にもあり、〈日本人の英語〉は、『国際英語』の一変種と考えることも可能なのである。」(後藤 2002, p 88) と指摘しており、英米人・英米文化・ネイティブ偏重の信仰から脱出して、「国際英語」として英語を学んでいくべきだと主張している。さらに、「国際英語」として伝わる発音・表現をして、国際有用度の高い英語にしていくこと、自国文化を説明し・他文化理解に向けて相互に寛容な態度で歩み寄る過程が大切であるという主張に共感が持てる。

矢野 (2004, p 193) も同じように述べており、「われわれは『拡大円』において、日常的に英語を使わない。…そこに、われわれが『国際語としての英語』すなわち、国際的相互理解度の高い英語の構築に貢献できる素地がある。規則的で、平易で、社会文化的に中立的な『国際語としての英語』を、人類共通の言語および言語行動に合うように変化させていくのに貢献できる立場にいる。」としており、「国際語として英語をとらえ」さらに、「どのように英語で表現するか」よりもまず「なにを言うのか」話す中身も大切であると付け加えている。また、矢野は、2008年9月 JACET 全国大会の基調講演でも述べていたように、目標とする英語として、“English used by educated people” という「教養のある英語」「教育を受けた英語」という点を挙げていることが大変印象的である。なぜなら、「国際語」としてまた「World Englishes」として、一見どのような英語でも安易に受け入れられる誤解を受けがちだが、「教養のある英語」として、ある一定の目標を英語教育の中では、持つべきだと考えるからである。

窪田 (2005, p.49) は、上記のような主張やそのほかの研究者の議論を客観的に分析し、「このような議論の前提は、研究者が現代の社会状況と英語の使用を考えた上での個人的な見解として語られたものが多く、学習者に対して実際に調査されたデータをもとにしたものは少ない。」としており、教師が目標とすべきであるとする英語と、学習者が目標としたいと考える英語は異なる可能性があるとして述べている。また、「世界の中の諸英語」に触れることで、学習者が様々な異なる英語を正当なものだとみなす態度を身につけることができるということはまだ深く議論されていないと、窪田は主張している。この客観的な指摘を考慮しつつも、英語を国際語としてどのように英語教育に反映させていくのか、また、グローバル時代のコミュニケーションに取り入れていくのか、更なる議論や、さまざまな実践とその具体的な報告が必要であるとする。

### III. 本学科の取り組み

本学科では、1993年度より、英語による一般教育科目を実施しており、現在では Sociology, History, Psychology, World Music, Geography, Statistics, Life Science, Anthropology を提供している。2年生は、その中から選択必修科目として12単位を修得しなくてはならない。また、リスニングスキル、ポキャブラリービルディング、Oral English, Graded Reading といった1年生基礎科目での45分授業の導入しており、伝統的な「文学中心に英語を学ぶ」という形ではなく、コミュニケーション・ツールとしての英語教育を目指してきた。

本学科の取り組みが、平成15年度「一般教育を統合した英語カリキュラム」により「特色GP」、平成17年度「専門職業人となる人材の基盤的英語教育 — 次世代版カリキュラム

開発と英語能力取得のための環境作り」において「現代GP」に採択されたことにより、さまざまプログラムが稼働した。その中でもインターナショナル・チューター・プログラムは英語に接する機会が少ない環境でグローバルな英語コミュニケーション能力を育てるために導入され、①カンバセーション・チューター・プログラム②ライティング・チューター・プログラムの二つの柱からなっている。

#### ① カンバセーション・チューター・プログラム

このプログラムでは、地域に住む外国人(多くは大学院留学生やその家族である)をカンバセーション・チューターとして採用し、Oral Englishの授業に参加してもらっている。2008年度チューターの出身国は、ポーランド・ウガンダ・ナイジェリア・フィリピン・ネパール・ウルグアイであるが、加えて、カンボジア・カザフスタン出身者がこれまでに活躍している。

これらのチューターはOral Englishクラスに配置された。1年次学生は、週4回45分授業のうち1～2回を、2年生は、週2回45分授業のうち1回を3人のチューターとともに受ける。1クラスの学生数は17～18人であるが、チューターの配置で4～5人の少人数グループで様々なトピックについて議論を深めることができた。

チューターは、学科の取り組みであるEnglish Lunchにも参加し学生との交流を深めている。これは、学期中毎日、昼休みを活用し英語を話しながら昼食をとるというもので、誰でも自由に参加できるプログラムである。話すトピックも特に決められていなく、学生のキャンパスライフから趣味やニュースの話まで、話題は幅広い。授業以外でもリラックスした雰囲気の中、英語を自由に話す機会として活用されている。

## ② ライティング・チューター・プログラム

このプログラムでは、アメリカ・オーストラリア・ニュージーランド出身の3名のチューターがライティングラボに配置されている。これは授業以外で英語ライティングの支援をする環境を整えることを目的としている。ライティングラボは、学期中10～11週間、月曜日から金曜日の9:00から17:00まで開かれている。学生は、1回30分のセッションを予約して、エッセイやレポートについてチューターから一対一でアドバイスを受ける。ラボでは、文章全体の構成や改善すべき項目を2～3点に絞って説明し、話し合いの中で学生が良い書き手になることを目指しており、英文をすべて添削することや課題を代わりに行うことはしていない。特に、英語による一般教育科目、たとえば、Sociology クラスのためのレポート作成などで活用されている。

ここでは、ライティング支援を中心に行っているが、英語に関する質問や英語面接の練習など、可能であればどのようなことでも、学生の英語学習のサポートを行っている。また、それぞれのチューターの出身国や文化について話を聞きに来る学生もいる。(具体的な報告は、北星学園大学短期大学部北星論集第6号、「ライティング・ラボの開設と運営についてーライティングチュータープログラムの可能性ー」を参照のこと。)

## IV. プログラムに対する学生の反応

プログラムに対する学生の反応を理解し、次年度のプログラム改善を目的に、各学期の終わりに学生に簡単なアンケート調査を行ってきた。2008年度前期終了後にもチューター・プログラムについての調査を行った。

### IV-1. 学生アンケート調査の実施

2008年7月第2～4週の間、必修クラス

の中で学生にアンケート調査を実施した。これは、2005年度～2007年度まで行っていたアンケートを改良して、Moodle上のアンケート機能を利用し、コンピュータを使ってオンライン上で質問に答える形式となった。アンケート項目は、学科プログラムに関する質問17項目と記述6項目である。回答者数は、208人であり、これは、在籍者数277人(1年生142人2年生135人)に対して、回収率は、75.10%となった。この論文では、下記の15の項目について報告する。

### IV-2. カンパセーション・チューター・プログラムに対する学生の反応(調査結果と考察)

問1 何年生ですか？

1年生：81人

2年生：106人

無回答：21人

問2 カンパセーション・チューター・プログラムは成功だったと思いますか。

項目 (n=208)	回答数	%
まったくそう思わない	3	1.44%
そう思わない	4	1.92%
どちらともいえない	11	5.29%
そう思う	119	57.21%
強くそう思う	71	34.13%
無回答	0	0

問3 カンパセーション・チューターがクラスにいて、あなたは授業中、話そうという気持ちになりましたか。

項目 (n=208)	回答数	%
まったくそう思わない	4	1.92%
そう思わない	3	1.44%
どちらともいえない	17	8.17%
そう思う	103	49.52%
強くそう思う	81	38.94%
無回答	0	0

問4 カンパセーション・チューターがクラスにいるということで、あなたのスピーキングスキルを向上させたと思いますか。

項目 (n=208)	回答数	%
まったくそう思わない	4	1.92%
そう思わない	7	3.37%
どちらともいえない	31	14.90%
そう思う	110	52.88%
強くそう思う	54	25.96%
無回答	2	0.96%

問5 全ての学生は、チューターに接する機会が平等にありましたか。

項目 (n=208)	回答数	%
まったくそう思わない	1	0.48%
そう思わない	13	6.25%
どちらともいえない	35	16.83%
そう思う	102	49.04%
強くそう思う	56	26.92%
無回答	1	0.48%

問6 カンパセーション・チューターの英語はわかりやすかったですか。

項目 (n=208)	回答数	%
まったくそう思わない	0	0%
そう思わない	10	4.81%
どちらともいえない	58	27.88%
そう思う	115	55.29%
強くそう思う	24	11.54%
無回答	1	0.48%

問7 チューターの英語を理解できないとき、あなたは何をしましたか。(複数回答可)

項目 (n=208)	解答数	%
"Pardon me?" "Excuse me?" を使った。	65	31.25%
"I don't understand." を使った	48	23.08%
"Could you say it again?" を使った	41	19.71%
その他の表現を使って聞きなおした。	79	37.98%
ジェスチャーを使う。	85	40.87%
日本語で友達に聞く	92	44.23%
何もしない。	6	2.88%

問8 カンパセーション・チューター・プログラムの良い点は何だと思いますか。

- いろいろな国の人と交流でき、さまざまな国やその文化を知ることができた。37人
- 話す機会が増えた。34人
- 英語力 (リスニング・スピーキングスキル) が高まった。17人
- 積極的に話をしようと、話す意欲がわいた。14人
- さまざまな英語 (発音など) を聞くことができた。11人
- 日本人だけだと甘えるので、英語で伝えなくてはという気持ちになった。10人
- チューターが平等に話す機会を与えてくれた。8人

- ・チューターが親切だった。7人
- ・英語で自分の言いたいことが伝わって嬉しい。7人
- ・授業が楽しかった。6人
- ・チューターがサポートしてくれた。5人

問9 カンパセーション・チューター・プログラムを良くするための改善点や、加えて欲しいことが何かありますか。

- ・特になし。56人
- ・チューターの人数や、来る回数を増やして欲しい。21人
- ・チューターの英語が聞きとりにくいことがある。11人
- ・早く話すチューターがいるのもっとゆっくり話して欲しい。6人
- ・いつも同じようなメンバーになってしまったので、もっといろいろな人と話したい。6人
- ・チューターの出身国の話をもっと聞くなど、授業内容を工夫して欲しい。5人
- ・均等に話す時間を与えて欲しい。4人
- ・チュータはもっと日本(語)を知っているべきだ。4人
- ・チューターばかり話しすぎである。3人
- ・チューターからもっと会話表現など教えてもらいたかった。3人

プログラム終了後のアンケート調査によると、「問2 カンパセーション・チューター・プログラムは成功だったと思いますか。」、「問3 カンパセーション・チューターがクラスにいて、あなたは授業中、話そうという気持ちになりましたか。」の両方の問いに、「そう思う」「強くそう思う」を合わせると、80%以上の学生が肯定的に答えており、カンパセーション・チューター・プログラムに対して学生の反応は大変良いことがわかる。

「問4 カンパセーション・チューターがクラスにいてということ、あなたのスピーキ

ングスキルを向上させたと思いますか。」では、約75%の学生が、「そう思う」「強くそう思う」と回答し、スキル向上に役立ったと考えている。「問5 全ての学生は、チューターに接する機会が平等にありましたか。」の問いにも、「そう思う」49.04%、「強くそう思う」26.92%となっており、プログラムの実施状況も良好だと考えられる。

一方、「問6 カンパセーション・チューターの英語はわかりやすかったですか。」の問いには、「そう思う」55.29%、「強くそう思う」11.54%と回答があるが、「どちらともいえない」27.88%と、「そう思わない」4.81%という回答者の合計がやや多めである。「問7 チューターの英語を理解できないとき、あなたは何をしましたか。(複数回答可)」によると、チューターの英語を理解できない場合、「友達に日本語で聞く」44.23%、「ジェスチャーを使う」40.82%、「そのほかの表現を使って聞きなおした」37.98%、「"Pardon me?" "Excuse me?" を使った。」31.25%の順で回答されている。日本語を使用したり、友人に頼ったりする姿勢から、自分で相手に説明を求める積極的な態度を養うように指導していく必要がある。また、どのような英語表現で相手に説明を求めたり、質問をしていくのかという点も、授業の中で教えていかなければならない。

「問8 カンパセーション・チューター・プログラムの良い点は何だと思いますか。」の問いから、学生の具体的な意見が明らかになった。「いろいろな国の人と交流でき、さまざまな国やその文化を知ることができた。37人」、「さまざまな英語(発音など)を聞くことができた。11人」の回答が多いことから、英語母語話者だけでなく、いろいろな国について、その文化について、さまざまな英語に接することができたことを肯定的に捉えている。また、チューター参加の少人数グループになったことにより、「話す機会が増えた。34

人」「英語力（リスニング・スピーキングスキル）が高まった。17人」「積極的に話をしようと、話す意欲がわいた。14人」「日本人だけだと甘えるので、英語で伝えなくてはという気持ちになった。10人」「チューターが平等に話す機会を与えてくれた。8人」など、話す機会が増えたこと、積極的に英語を話そうという姿勢になったことは、大変良い結果である。また、「チューターが親切だった。7人」「チューターがサポートしてくれた。5人」との回答もあり、チューターが授業の中で、学生をサポートする重要な役割を果たしたことも見逃せない。

「問9 カンパセーション・チューター・プログラムを良くするための改善点や、加えて欲しいことが何かありますか。」で明らかになったのは、「チューターの人数や、来る回数を増やして欲しい。21人」という回答から、学生がこのプログラムを肯定的に考えていることである。しかし、いくつかの改善点も明らかになった。「チューターの英語が聞きとりにくいことがある。11人」「早く話すチューターがいるのももっとゆっくり話して欲しい。6人」「チューターばかり話しすぎである。3人」の回答から、一部のチューターの態度や英語表現に不適切なところがあったようだ。チューター会議で、効果的なコミュニケーションの方法について、話し合っていく必要があると共に、学生自身が、「もう一度言ってください」「ゆっくり話してください」など積極的に表現し、コミュニケーションを円滑に進める姿勢を育成する必要があると感じる。また、少数であるが「チューターの出身国の話をもっと聞くなど、授業内容を工夫して欲しい。5人」という回答から、相手の文化や国の制度を知るようなトピック、日本やその文化を相手に説明するようなテーマを選ぶなど、授業内容について再考する必要がある。インターナショナル・チューターの存在が、効果的な形で活用されるような工夫が必要で

ある。その具体的な方法については、後述する。

このように、英語ネイティブスピーカーの教員だけでなく、インターナショナル・チューターの英語に接することで、いろいろな英語の音や表現に慣れると共に、お互いの国や文化について意見交換し、理解し合うためのコミュニケーション能力を育成できると確信している。

#### IV-3. ライティング・チューター・プログラムに対する学生の反応（調査結果と考察）

問10 ライティングラボを訪れたり、ライティング・チューターと話をしたことがありますか。

項目 (n=208)	回答数	%
はい、英会話の練習のために	19	9.13%
はい、作文のチェックのために	111	53.37%
いいえ	66	31.73%
無回答	12	5.77%

問11 ライティング・チューター・プログラムは成功だったと思いますか。

項目 (n=140)	回答数	%
まったくそう思わない	3	2.14%
そう思わない	3	2.14%
どちらともいえない	12	8.57%
そう思う	65	46.43%
強くそう思う	57	40.71%
無回答	0	0

問12 ライティング・チューター・プログラムであなたのライティングスキルが高まったと思いますか。

項目 (n=140)	回答数	%
まったくそう思わない	4	2.86%
そう思わない	8	5.71%
どちらともいえない	27	19.29%
そう思う	61	43.57%
強くそう思う	27	12.99%
無回答	13	10.00%

問13 何回ライティング・チューター・プログラムを活用しましたか。(何回チューターに会いましたか。)

項目 (n=140)	回答数	%
一回	25	17.86%
二回	27	19.29%
三回	20	14.29%
四回	20	14.29%
五回	14	10.00%
六回	4	2.86%
七回	4	2.86%
八回	2	1.43%
九回	0	0
十回以上	9	6.43%
無回答	15	20.71%

問14 ライティング・チューター・プログラムの良い点は何だと思いますか。

- ・正しい文章に直してくれる。16人
- ・自分では気づかなかった間違いを指摘してくれる。15人
- ・わかりやすく丁寧に指導してくれる。9人
- ・知らない語彙・表現を教えてくれる。7人
- ・細かく教えてもらえてよかった。6人
- ・1対1で出来るのが良かった6人
- ・英語だけで話せるので、英会話の練習にもなった。5人
- ・ネイティブスピーカーの表現を学べる。4人
- ・チューターが優しく、いい人だった。4人
- ・予約制で都合の良い時に行くことができ

る。4人

- ・英語力が高まった。3人

問15 ライティング・チューター・プログラムを良くするための改善点や、加えて欲しいことが何かありますか。

- ・いつも混んでいるので、人数を増やしたり、開いている時間を長くして欲しい。31人
- ・チューターによって指導に差があった。4人
- ・文法的な間違いだけでなく、もっと詳しく教えて欲しい。3人
- ・チューターがイライラしているときがあるので、優しくして欲しい。3人
- ・1回のセッションの時間が短かった。2人
- ・書いてもらった字が読めないことがあった。2人

このプログラムに対する学生の反応もおおむね良好である。「問10 ライティングラボを訪れたり、ライティング・チューターと話をしたことがありますか。」の質問に対しては、53.37%の学生が「英作文チェックのために」、9.13%が、「はい、英会話のために」と答えており、約6割の学生が利用していることになる。Writing Labの記録によると、これは、おもに2年生の学生の利用が多い。また、31.73%の学生は「いいえ」と答えており、全く利用していない学生がいることも明らかである。「利用したいがしていない」のか、「ライティングラボの存在について知らない」のか不明だが、どちらにしても、ラボの利用について広報活動を続けていく必要があると考える。

「問11 ライティング・チューター・プログラムは成功だったと思いますか。」では、「そう思う」46.43%、「強くそう思う」40.71%との回答が非常に高く、肯定的である。「問12 ライティング・チューター・プログラムであるあなたのライティングスキルが高まったと思

ますか。]の問いには、「そう思う」43.57%「強くそう思う」12.99%となっているが、「どちらともいえない」19.29%、「そう思わない」5.71%、「まったくそう思わない」2.86%という数字に注目したい。数は多くないがこの結果は、ライティングスキルを伸ばすためのプログラムというよりは、ライティングを見てもらう、添削をうける場所という印象になっているのではないかと懸念される。

ラボの利用回数も学生によって違うが、1回から5回利用している学生がほとんどである。「10回以上」と答えている学生9名と少数であるが、定期的に活用していることがうかがえる。「問14 ライティング・チューター・プログラムの良い点は何だと思いますか。」の問いでは、「正しい文章に直してくれる。16人」「自分では気づかなかった間違いを指摘してくれる。15人」「わかりやすく丁寧に指導してくれる。9人」「1対1で出来るのが良かった6人」と対面指導ならではの利点が表現されている。また、「知らない語彙・表現を教えてくれる。7人」「ネイティブスピーカーの表現を学べる。4人」など、新しいことを学ぶ場にもなっている。「英語だけで話せるので、英会話の練習にもなった。5人」など、ライティング以外でのサポートとしても活用されている。

改善点としては、「問15 ライティング・チューター・プログラムを良くするための改善点や、加えて欲しいことが何かありますか。」の回答から、「いつも混んでいるので、人数を増やしたり、開いている時間を長くして欲しい。31人」と、学期末の繁忙期の混雑についての記述が多かったので、改善していきたい。「チューターによって指導に差があった。4人」、「文法的な間違いだけでなく、もっと詳しく教えて欲しい。3人」「チューターがイライラしているときがあるので、優しくして欲しい。3人」など、一部のチューターに対すると思える要望があったので、チュー

ター会議で学生とのコミュニケーションの取り方について、議論していく必要がある。

上記の結果から、チューターに対するガイドラインの作成や、チュータートレーニングの必要性など課題も多いが、学生の英語学習環境を整える大切なプログラムであると考えられる。

## V. インターナショナル・チューターの利点

二つのプログラムを通して、インターナショナル・チューター採用の利点について、下記のような点が挙げられる。

- ① Expanding Circle, または、EFL (English as a Foreign Language) という環境で、さまざまな英語に接し、コミュニケーション能力を高めることができる。
- ②地域の留学生と交流し、さまざまな国とその文化について知ることができる。
- ③英語を第二言語・外国語として学んできたチューターは、よい英語学習者モデルであり、英語学習の方法についても話を聞くことができる。
- ④チューターは授業に対するフィードバックや学生の様子など教員では見えない点を指摘してくれ、授業の改善にもつながる。
- ⑤非常勤講師と違って、チューター採用は経済的であり柔軟に採用を決定できる。

しかし、プログラムを成功させるにはさまざまな課題がある。

- 1) 一部チューターの発音や学生に対する態度の問題
- 2) 教員とチューターの連携
- 3) プログラムに対する理解

これらの課題を解決するには、チュータートレーニングや教員とチューターとの意見交換を行うチューター会議が有益であった。学

生の中には、「一部インターナショナル・チューターの発音が分かりにくい」、「チューターばかり話してしまう」などの意見もあったが、これらはチュータートレーニングの中で話し合い、チューターに本学の学生の英語力を理解してもらい、学生が積極的に話すことができるように説明した。

教員とチューターの連携を強めるためにも、常勤・非常勤教員との話し合い、チューターからの意見を取り入れるなどの工夫が必要である。特に、学生のアンケート調査からるように、インターナショナル・チューターの国や文化について学ぶ機会や、ディスカッションのトピックについても工夫が必要であると考えている。

また、ライティングでは、学生が少しでも書くことを好きになるように励ますようお願いしている。温かい一対一の人間的なサポートを重視し、学生のモチベーションを上げるように考えている。

学生にプログラムの意義を説明するために、オリエンテーションでの広報活動、授業の中での説明など、何度もプログラムについて伝える必要がある。学科の各教員も、アカデミック・アドバイジングを通して学生の反応を聞き、プログラム改善に役立てると共に、インターナショナル・チューター・プログラムの意義も説明している。

チューターとのコミュニケーションを通して、さまざまな英語に触れること、また、意思疎通を図るスキルを学ぶことができることが何よりも有益なことである。インターナショナル・チューター・プログラムには、まだ、解決しなくてはならない課題もあるが、英語に接触する機会が少ない環境で、グローバルな英語コミュニケーション力を育てる有効な取組であると確信している。

## VI. 結語

グローバル時代のコミュニケーションのために、国際語として英語をとらえ、自信を持ってコミュニケーションできる学生を育成するために、学生の意識を変えるだけでなく、教員が積極的に、グローバルコミュニケーションをとる機会を学生に与える必要があると考える。学習者が望む目標の英語は、しばらくは今までのように欧米のものであるかもしれないが、それを地道に学び言語運用能力を高め、それと同時に、さまざまな英語の種類やそれぞれの国の文化的背景に寛容で、円滑にコミュニケーションできるスキルも兼ね備えた学生を育てていくことが大切なのではないだろうか。それには、基本となる語彙や文法の習得を目指すだけでなく、さまざまな英語の音や表現に触れその特色に気づくこと、そしてそれを認める態度を育てることが重要である。また、コミュニケーション時に起こる問題を解決し、誤解をとくために必要な英語表現を学ぶこと、コミュニケーションを図る積極的な姿勢を育成することが必要不可欠である。英語の未来、特にこれからの日本での英語の使用について、具体的な方向性が明確ではない今日、私たちの身の周りで実行可能な方策として、インターナショナル・チューター・プログラムは有益だと考える。物理的に、グローバルコミュニケーションの可能性が低い地域では、このようなプログラムは、小さい一歩だが、確実な一歩になるのではないか。

### [注]

本稿は、第47回 JACET 全国大会にて報告した内容である。

### [参考文献]

窪田光男, 2005, 「英語教育における『国際語としての英語』: 前提とされる学習者 関西外国語大学研究論集 第82号, pp.35-50

- 後藤いく子, 2002, 「世界の英語・日本人の英語  
(前)」『東海女子短期大学紀要』第 28 号, pp.  
75-89
- 後藤いく子, 2004, 「世界の英語・日本人の英語  
(後)」『東海女子短期大学紀要』第 30 号, pp.  
37-45
- グラッドル, デビッド 山岸勝栄, 1999, 『英語の  
未来』, 研究社出版
- 前野澄子, 2003, 「世界英語と新英語—変わりゆく  
英語—」『鎌倉女子大学紀要』第 10 号, pp.  
159-165
- 矢野安剛, 2004, 「外国語としての英語」から「国  
際語としての英語」へ 英語教育再考『早稲  
田大学大学院教育学研究科紀要 第 14 号,  
pp.179-195
- Crystal, D. (1997), *English as a Global Language*,  
Cambridge University Express
- Mackey, S. L. (2002) *Teaching English As an  
International Language: Rethinking Goals  
and Approaches*, Oxford University Press.

[Abstract]

## International Tutor Program for Cultivating Global English Communicative Competence

Kyoko MORIKOSHI

Tadashi BANNAI

Today the number of non-native speakers of English who use English as a second or foreign language is larger than that of English native speakers. Many scholars feel that English should be taught as an “International Language,” and varieties of English should be respected as “World Englishes.” Not having many chances to use English in the community nor to meet people from different countries, our students do not feel the need of communicating with non-native English speakers. In the century of Global communication, students should be exposed to varieties of English to be prepared for communication with people all over the world. Therefore an international tutor program was introduced at Hokusei Gakuen University Junior College. The program has two aspects: a conversation tutor program and a writing tutor program. In this paper, the benefits of having international tutors in these programs and the students’ reactions towards the programs are discussed. Most students have positive feelings towards these programs, and they are enjoying English classes with international students. Not only teachers but also tutors play a very important role in the classes. Though there are a few difficulties in communicating with international tutors, it is a good chance for the students to improve their English and communication skills.